

## 均衡者：韓国政治と東北アジアの将来に対する盧武鉉大統領のビジョン

著者 Emanuel Pastreich

韓国大統領は、インターネットの可能性は取り入れ、手短にインパクトを与えるようなスピーチをするのは拒否するという点で、メディア時代の政治家としてユニークである。オンライン政府のイメージを広げるために、彼は毎週何時間もオンライン作業に取り組んでいる。米国のホワイトハウスに該当する青瓦台大統領府のホームページには、大統領がノートパソコンで猛烈にキーボードを打つ姿が掲載されている。自身の鑑としてしているエイブラハム・リンカーンに関する本を執筆した盧大統領は、リンカーンのように、深く、知的な内容を含んだスピーチ文章を作成する。彼は自らを、南北に分断され、内部分裂の中にある国家の指導者であると考えている。彼は、進歩的な思想観念および崇高な理念が社会を変えられると信じ、これを自分の仕事の指針にもしている。

さらに驚くのは、盧武鉉は自身に批判的な社会世論報道を気にしないことだ。多くの場合、彼はこのような批判を喜んで受け入れるかのように振舞っている。たとえ大統領ポストを失う危険を冒しても、全力を尽くし、自分の政策を貫こうとする。2002年12月19日、彼は大統領選挙時に才能を発揮、当選した。以後、韓国国内の頑固な保守派から今までにない抵抗を受けた。保守派たちは、彼の改革が政府に直接的に、あるいは潜在的な脅威をもたらすと見ている。斬新な韓国の理想を作り上げるために、彼は多大な努力を払ってきた。彼の公平無私な姿勢は、多くの人に尊重されたが、古臭い政治に慣れきった財界指導者、官僚及び政治家たちの心を動かすことは決してない。

第5共和国（1980～1988）を支配した脅迫と腐敗の文化は、韓国において未だに姿を消していない。金泳三大統領時代には、法治国家に向かって前進したのにも関わらず、やはり前任者たちの政経癒着関係を多分に受けついで。金大中大統領は、韓国の社会風土をよりオープンなものにするため多大な努力をしたが、それは1970年代、80年代の韓国人が慣れた方式を相当踏襲したまま、大統領の権威及びその影響力を十分に利用することによって可能であったのである。彼らとは対照的に、盧大統領は自身をとてアプローチしやすい存在にしようと努力した。彼は、政府官僚は個人的な利益ではなく、国の可能性という理想に対する献身から動機を見つけることを期待している。このようなビジョンは、多くの韓国人にとってやはり新鮮そのものであった。

2004年、盧武鉉は保守的なハンナラ党及び新千年民主党（盧大統領を候補として推薦した）の一部党員から弾劾された。一言で言えば、これは韓国社会が分裂している結果によるものだった。韓国政治は長い間、南東部の慶尚道と南西部の全羅道を勢力基盤とする地域構図によって支配されてきた。そのような勢力基盤は依然として残っているものの、盧大統領の当選で明らかになったように、経済、社会及び文化的イッシ

ユーが主要な要因となっている。韓国社会では、国内外問題に対し、著しく異なる発想を持った二つの主要な勢力集団が浮上した。両勢力は、各自異なった媒体で情報を獲得している。韓国内部の意見が大きく分かれているため、盧大統領政権の簡単な課題さえも、極めて複雑になっている。

まず、国内の保守派は韓米同盟を外交政策の出発点とし、経済の発展を重視し、社会問題を軽視している。彼らは主に保守系の新聞「朝鮮日報」を世界を知る窓口としている。この新聞は盧武鉉が大統領に当選した後、彼を幾度も猛烈に攻撃をした。

次に、主に 368 世代と呼ばれた若い有権者。386 の 3 は、年齢が 30 代（彼らの多くは 40 代になっている）という意味で、8 は彼らが 80 年代に大学に進学し、全斗煥政府の抑圧を直接経験したという意味である。学生として、彼らは民主政治を渴望し、それを実現するために奮闘することを惜しまない。この世代はかつて学生運動に参加し、多くの大学を催涙弾の実験場に変えた。6 は、彼らは 60 年代生まれで、韓国の工業化が急激に進んだ時期に成長したことを指す。

これら進歩的な人たちは、みんな社会と政治公務に従事している。386 世代は、「ノサモ」（盧武鉉を熱心に支持する組織）として、よく代弁される。保守派マスコミは「盧武鉉が必ず失敗する」と、大多数の韓国人と米国人に盧武鉉が勝つ見込みはないと信じ込ませようと強く予言していたにもかかわらず、この忠誠心のあるインフォーマル組織が新しい手段——インターネットを利用して彼を大統領の座に成功裡に押し上げた。ノサモは米国の政策を痛烈に批判し、韓国が世界舞台において創意的な役割を演じるよう望んでいる。彼らは多くの人（多くは地域の枠を越えた忠実な支持者）の意見を代表し、オンラインニュースサイトを利用して情報を取り入れる。例えば、韓国のネットワークサイト——プレシアンと Oh! My News。彼らは相互対話できるインスタント・メッセージ及び動画像を利用して社会、政治活動を展開している。彼らが迅速に発信することにより、韓国社会は確実に変わった。

このほか、まだ多くの方が政治から疎遠となっている。どの政党も現状を変え、社会の発展を促進することはできないと感じているからである。サッカーのワールドカップ（2002 年 6 月）時の極めて強い楽観主義が消え去り、盧武鉉当選後（2002 年 12 月）、政治に嫌悪感を抱く人がますます増えた。

### 周辺から中心へ：無名からトップに台頭した盧武鉉

第二次世界大戦後に生まれた盧武鉉大統領は、幼少時の朝鮮戦争の記憶以外には戦争を経験したことがない、初めての韓国大統領だ。彼はまた、高等教育に進む標準コースを経験していない大統領としてもはじめてである。実際、国内で肉体労働及び社会公務に努めている、もっとも進歩的な人々でもさえも、皆相当な権威を持つ既得権層の出身者だ。

盧武鉉は1946年、金海村にある貧しい農民家庭で生まれた。家は貧しいが、彼の両親はできるだけ子供に教育を受けさせた。盧武鉉は自伝の中で、母親がいかに常に自分を支え、前へと進むよう励ましてくれたかを述べている。彼は、故郷の若者の一般的な悲観主義を避けられたのは、母親の励ましのお陰だと語っている。彼は、自分が成功できたのは道德の基準を厳しく教えてくれた母親の功績だと語り、伝統的な儒教学者を彷彿とさせる。「風に飛ばされない」彼の断固さは、後日彼に襲い掛かった衝突の一部を説明できると、彼は書いている。

盧武鉉は1966年釜山商業高校を卒業した。これは貧しい学生に奨学金を提供するわずかな学校の一つだ。3年間兵役に服した後、幼なじみの恋人権良淑と結婚し、働き始めた。最初某漁網製造会社に就職したが、生活及び家賃の支払いにも足りないぐらい給料が少ない。子ども時代の夢を実現することを決心し、弁護士資格試験に参加するため一生懸命勉強した。高卒の学歴しか持っていない彼にとっては、勉強する以前に、検定試験に合格しなければならなかったのである。1975年、4回目の試験でようやく合格した。博士号所持者だらけの政界では、盧武鉉はまさに変わり者だった。

続いて、盧武鉉は司法研修員の2年間課程を履修し、1977年に大田の地方裁判官となった。皮肉なのは、夢が実現した後、政府仕事の残酷な現実に直面しなければならなかったことだ。なぜなら、1970年代の韓国はちょうど朴正熙大統領の権力主義政府の統治下にあったからである。現実には彼の理想にはかなりかけ離れていた。7ヵ月後辞職し、自分の法律事務所を設立した。1979年、朴正熙が韓国中央情報部部長に暗殺され、全斗煥が大統領の座を掌握した。全斗煥が光州市民の民主化運動を残酷に鎮圧し、しかも各大学及び新聞に対して自身の政権に不利な評論を徹底的に抑圧した。彼と比べれば、朴正熙政権の方がまだ柔和であった。1981年、ある弁護士が政治関連で政府との間に摩擦が生じた。盧武鉉はこの係争中の案件を引き受けた。無名な弁護士で、しかも政府内のつながりもなく、この案件をより慎重に処理できる最適な人選であった。

盧武鉉は、「釜林事件」で控訴された学生を弁護することで彼の一生は変わった。釜林は政府命令で解散したある学生のスタディクラブだ。政府の目的は左翼理論を不法に習う学生を控訴することだった。盧武鉉はこれら苦難に遭遇した学生に会い、彼らの話に耳を傾け、彼らの体の傷を調べた時、自分の息子が同じ運命にあったらどうするだろうと考えた。これら死に追い込まれた子供たちの、ひどく悲しんでいる母親たちとの面会を通して、韓国の抑圧政治のひどさを強く認識したのであった。このことが、彼を政治の世界へと誘った。

人権は盧武鉉が注目する最も主要な課題になった。彼はあふれるばかりの熱意で民主のため弁護し、韓国現代史上最も抑圧された時代の新興労働者運動を支持した。このようなことが彼に深い洞察力をもたらしてくれた。1984年、釜山環境汚染研究所所長に就任し、生態環境問題にも極めて強い関心を寄せている。1987年、「六月闘争」運

動のリーダーとして、全国規模で大統領を直接選挙する改憲闘争を起こした。政府がデモ隊に屈し、大統領を公開選挙にすると承知した時、盧武鉉は顕著な政治的立場を手に入れた。

大宇造船工場の労働者、李錫圭を弁護した関係で逮捕され、彼の人生はもう一回変わった。李錫圭はストライキ中警察が投げた催涙弾によって殺された人だ。盧武鉉は労働者側の代表として給料と賠償を求めて交渉した。彼の李錫圭への弁護は「第三者の干渉」で「葬式を攪乱した」と告発され、彼の弁護士生命はこれで幕を閉じた。

1988年、盧武鉉は決心して、釜山東区で金泳三が率いる統一民主党の候補として国会議員選挙に立候補した。彼は、経済的堅固な後押しがあった与党候補者に勝ち国会に進出、労働委員会で労働者の権利の擁護者として頭角を現した。彼は、第5共和国の政治腐敗を調査するための特別委員会の一員として、全斗煥政府高官の腐敗問題への質問攻勢を主導した。他の議員らは現代グループの創始者鄭周永或いは前中央情報部長張世東から恨みを買いたくなかったが、盧武鉉の質疑は遠慮なしの激しいものだった。

1990年、盧武鉉は2つの野党が合併し、民主自由党を立ち上げるという動きに反対した。彼は公の場で、野党の前リーダー金泳三がそれまで韓国を主導してきた勢力に妥協することで大統領の座を手に入れようとする行為を非難した。なぜなら、これらの政権は韓国に抑圧の暗黒時代をもたらしたからである。彼は、基本的な立場を妥協してまで権力を手に入れることがないような改革党の設立を呼びかけた。民主自由党が政権を手に入れ、民意を無視した通信法案を可決させた後、盧武鉉は国会から出て、市民運動に復帰した。このような原則厳守が原因で、1990年代ずっと政治の周縁に立たされたが、彼に忠実な支持者もこれによって生まれた。

1991年から1997年に金大中が大統領に当選するまでの間、盧武鉉はずっと野党間で均衡者の役割を演じていた。彼は、小さい野党の間で話し合いを設けたが、その目的は国家政策に影響を与えられる統一団体をつくることだった。この時期、彼はたくさんの地方或いは国家レベルの選挙（それぞれ1992、1995、1996と2000年）に立候補した。新政治国民会議（NCNP）の元で初めて大統領選挙も経験したが、いずれも成功しなかった。しかしこれらの失敗は支持者たちに彼への信頼感を高めた。なぜならこれらの選挙を通して彼が基本的立場で妥協しない政治家だと分かったからだ。政府の透明度、政府の市民への責任感、行政に対する参加構造及び地域と社会階層の資源分配の不公平を是正する、等等のような基本問題は、積極的に政治に参加する人及び見識のある有権者たちすべてが注目する話題だ。しかも、盧武鉉は仕事を失う代価を払っても同局の黒幕を暴露することを惜しまなかった。彼の言行は、日本の侵略戦争、朝鮮戦争及び軍事政権時代の秘密のベールを明らかにしたい民衆の心を動かした。

盧武鉉は2つの時期において自分を大統領の座に押し上げるネットワークを構築でき

た。一つは、1980年代、彼がまだ政界の外にいた時期で、もう一つは、1990年代、彼が一生懸命野党を集め、有権者にとって政権を負う資格を持っていると考えられる選択肢になりうる道を探ったじきだった。この2つの時期のグループは、政界要人になるには欠かせない法律及び知的ネットワークをつくってくれた。有名な宗教リーダーと弁護士たちはプサンで野党を組織し、毎回の選挙時に変わりなく彼を支持した。1984年以来、盧武鉉がずっと関与してきた環境保全運動の組織も彼を支持した。廃棄物のリサイクルやエネルギー保全や公共交通などに対する彼の信念はこの時期に遡る。韓国の政治文化は、特異である。それは、たくさんの詩人や小説家たちが非常に重要な役割を果たしている。例えば林正男（詩人姜恩喬の夫）、小説家の金延漢などの知識人が盧武鉉にきわめて重要な支持を捧げた。368世代はたびたび挫折を繰り返したが、彼らは静かな情熱で最終的に盧武鉉を政治の前舞台に押し上げることに成功した。

1997年、盧武鉉は金大中の大統領選挙のため一生懸命働いた。金大中はかつて良心の囚人であり、人権擁護の呼びかけ人でもあった。民衆は、アジア金融危機の際、国民の基本利益を保障できなかった韓国政府に対して不満をもっていたが、このことも彼の勝利の一因となっている。盧武鉉は進歩勢力と手を組み、彼らの要求を調整し、金大中の勝利に一臂の力を貸した。

金大中は、韓国を発展した民主主義へと再建しようとする情熱をもった野党議員を大挙起用したが、盧武鉉もそのような人の1人であった。彼は海洋水産部長官に任命された。初めて国の執行機関で働くこの機会のおかげで、彼は行政を具体的の実験することができた。彼は彼の色を前面に出し、民主化運動の間に開発した非階級主義的統治と水平的相互作用のアプローチ法を導入した。彼は政府を相手に何十年も抗争してきたが、相変わらず敬虔な儒教者のように、最終的に社会の不平等現象を根絶できるのは政府しかないと思っている。いろいろな問題を解決するため、彼は頻りに漁民、企業家、一般市民及び各レベルの公務員と接触し、しかも小さな範囲ではあるが「知識型管理」の理念も実行した。

### **盧武鉉は2002年大統領選挙で勝利を手に入れた**

2002年12月9日、盧武鉉は圧倒的な支持で大統領に当選した。しかしこれは奇跡的といっても過言ではない。なんとといっても、彼の最も有力な支持者、鄭夢準（現代財閥創始者の息子）が最後の時彼を切り捨てたのだ。いろいろ尋常ではない状況と未曾有な方法が却って彼を勝利へと導いた。

金大中の当選は、金融改革政策の上に成り立ったものだ。この改革は1997年のアジア金融危機の屈辱と社会不安定がもたらしたものだ。金大中は一連の経済改革を行ったが、多くの韓国人はさらなる全面的な改革を渴望していた。金大中の一連の政治スキャンダルで、民衆が彼の改革の実質性を疑い始めた後は、特にそうだった。金大中は統一した未来を期待する韓国に希望を与えたが、先進的な有権者は、腐敗した後

援制度と、1940年代以来（別の見方から言えば20年代以来）韓国を支配してきた不動の政治的支持勢力と関連があるとされる政治機構のほとんどを存続させた。裸一貫で身を起こした盧武鉉は、反保守派のイメージを築けた。しかも、与党候補として出馬したでさえ、このイメージを貫いてきた。

選挙の初期から盧武鉉は非難を浴びた。彼は候補者の基準を満たしていないと指摘する人がいた。1988年から彼はずっと政界で活躍していたが、中央政府での職歴は海洋水産部長官を歴任した、たった7ヶ月だけだった。選挙初期、盧武鉉の反対者たちが、「青瓦台大統領府は大統領の研修場所ではない」といったことがある。彼の対立候補である李会昌は、すでに首相に当選する前から重要なポストで働いていた。

盧武鉉は個人のホームページで、長官として勤めた時期の政治業績を公開することで、これらの攻撃に応じた。たくさんの例を挙げ、自分がどのように政権を握るのか、異なる団体間の衝突をいかに解決するのかを明確に説明し、韓国政府を改革する一連の主張を示し、一般公務員に権力を与え、同時に、定例会議において何事もしないのに権力に執着している官僚たちに対して猛烈に批判した。

盧武鉉は明らかに外交、国防と経済面では経験不足だが、大統領としての気質と決断力を示した。彼の相手、李会昌は選挙スタート時に大幅にリードしたが、ある金融スキャンダル及び彼の息子が非合法的な手段によって兵役を逃れたことが明らかになり、選挙戦はより接戦となり、一時勝負がつかない状態となった。最終的に意外な結果になった。盧武鉉は普通の人を演じ、権力と対抗できる斬新な顔を作り上げたことで、成功へと導かれた。最も重要なのは、彼がかつて民主化及び人権運動時に得た忠実な支持者たちが即時に彼のためにキャンペーン活動を広げてくれたことだ。彼らの努力に李会昌の支持者たちの力は全然及ばなかった。若い支持者たちが昼夜なく働き、李会昌の支持組織の行動に迅速に反撃するようインターネットを通して発信し、すばらしい効果をあげた。

2001年6月、米国軍事法廷が二人の女の子を轢き殺した二人の装甲兵に無罪判決を下したことに對して全国で数十万の韓国人が集まってデモをし、抗議した。盧武鉉は韓国が国際舞台で新しい役割を演じるよう期待していた。彼のこの姿勢はこの時期では特別な影響力を広げた。悲劇が人々に次のような事実に気づかせた。つまり、『米軍地位協定』によって米軍が韓国の司法判決を否認することができると。これは日本とドイツでも同じだ。このほかに、ワールドカップの日韓共同主催によって韓国は先進国の列に入った時期となった。なぜなら、ワールドカップによって、韓国は自分のライバル及びかつての宗主国と対等に振舞うことができたからである。これは韓国人に自信を与えた。

ワールドカップの成功、及び法律に基づいた装甲兵事件の処理の仕方が、韓国人にこのようなヒントを与えた。つまり、韓国は信頼感のある民主国家、経済大国になった

にもかかわらず、国際世界では同等な権力を享受することできない。長い間の米国との軍事、外交上の不平等関係によって、多くの韓国人は、より自主的で、更なる発言権をもつ国にしてくれる大統領候補者に傾倒していった。

今回の選挙は保守派と改革派の間の対立だと見られているが、最終的にこのような結果となったのは政策の差であり、イデオロギーの差ではないことが、明確に示唆できるだろう。盧武鉉の正義を堅持する熱意は、彼の儒教思想の公明正大に大きく由来している。彼はたくさんの左翼メンバーと一緒に働いてはいるが、左翼の教条は決して受け入れない。構造改革の選挙演説の中で、イデオロギー的な粉飾をしなかったことにより、政局から押し出されることを避けられた。有権者にとって、李会昌と盧武鉉の出身階級の差は明らかであった。つまり、李会昌は輝かしい名声を有する家庭で生まれたのに対して、盧武鉉はリンカーンをモデルとし、裸一貫から身を起こしてきたのだ。

### 大統領としての盧武鉉：韓国の政治文化の海を航海

大統領としての盧武鉉は、権威と決断力、そして謙遜さを兼ね備えたイメージを伝えようと努力してきた。しかし、若者特有の生気とわんぱくさは相変わらず輝いている。同時に彼は、青瓦台の会議の席上で、特に女性に対し大きな尊敬を表し、彼は歴代政府の誰よりも女性を擁護してきた。

インターネットのおかげで、盧武鉉は高位、下位問わず、政府の全ての官僚と直接意見をやりとりすることができた。彼は毎日、夕方何時間ずつ韓国の歴史上前例が無いほど、政府関係者と論争を繰り返している。盧武鉉は市民を政治に参加させようとし、自身を一般市民の擁護者であると強調する。個人との非公式的協議を禁止させた彼の決定は、それが長い間、韓国の政治を支配してきた影響力と後援パトロンに対する挑戦であるにもかかわらず、高い清廉さを見せてくれる。盧武鉉は国家安保との関連においても、他の人が同席しない状態ではだれとも会わないと宣言した。盧武鉉は職位の高低は問わず、すべての担当官が大統領と直接相談するよう奨励する場合と同じように、清廉潔白を確認するために意図された彼の政策は、それまで認められてきた慣行と命令系統を侵害した。

盧武鉉は、政府の能率化および民主化の手段として電子政府を開設した。彼はインターネットをすべての市民、即ちネチズンがアプローチできる通信手段を作ることによって、「市民のための政府」政策を稼動させた。人々は韓国全域でネットワークによってつながっているコンピュータから接続が可能だ。人口の70%に該当する約3,100万名のインターネット人口をもつ韓国は、政府と社会内での力の階級制度に挑戦している。今日、韓国で楽観論と意見の対立が存在するのは、まさにこのためだ。

米国の政治家の修辞に慣れた人が、盧武鉉の演説を聞くのであれば、明らかに驚愕するだろう。まず、盧武鉉は地味さを保ちながら、大きな信念をもって振舞うのだ。彼の声は落

ち着き、彼は具体的なイシューと概念をつなげる論理的主張をもって演説する。さらに重要なことは、多くの政治家は一般聴衆が複雑な内容を理解できないだろうと仮定し、簡単な文章を羅列し演説をするが、盧武鉉は聴衆に関係なく、複雑な問題を説明する。彼は一般聴衆が納得できないほど複雑な概念や矛盾はないと考える。もしかしたら、このようなアプローチの仕方は、盧武鉉が独学をしてきたという事実から出てきたのかもしれない。

盧武鉉大統領は、自分のスピーチを政策の重要な一部として考えている。盧武鉉大統領の文章は文学的で、読んでいて楽しく、制度的な問題を取り上げるときは、精神的な次元になることもある。盧武鉉大統領のスピーチは、十分に妥協する能力がありながらも、自分を当選させてくれた理解関係者よりもっと大きなあることを自分の使命と考えたリンカーンのスピーチを想起させる。盧武鉉大統領が自分を選んでくれた利益集団に無関心だというのではなく、大統領としての職務に対し、相当に幅広い認識を持つことによって、反対する者に対し根に持ったり、恨みを抱いていないということである。

端的に述べると、盧武鉉大統領は、原則が一国家を変えることができるという儒教的理想に忠実である。彼は、いわゆる「美しい原則」について文章を書きもするし、奥深い統治の美学を持っている。韓国の力が全盛期であった15世紀の制度的改革と技術革新をすべて兼ね合わせた世宗のように、盧武鉉大統領も国政諮問を得るために定期的に学者と専門家に会う。世界各国の多くの指導者とは異なり、盧武鉉大統領は、特別な利益集団と良い関係を維持するために、多くの時間を割かない。彼の政策に対し不満をもつ人は多いが、盧武鉉大統領の就任の間、韓国は明らかにずっと開放的で、成熟した社会になったのは事実である。

大体、盧武鉉大統領は自分だけの独自の政策を展開するのにおいて穏健主義者である。例えば、イラク派兵の決定は、自身の強力な支持者の多くの意に反して行われた。そのようにした理由は、米国との強力な関係が韓国の長期的な利益にもっとも役に立つと判断したためである。盧武鉉大統領は、統治の原則に忠実ではあるが、理念的な立場は取らない。出身背景のせいで、盧武鉉大統領は民主化運動のころ、運動をしていた学生とある程度、距離を保った。盧武鉉大統領は政治的闘争や圧制を受ける者たちの苦痛を鋭く認識していたが、マルキシズムや階級理論にははまらなかった。盧武鉉大統領は自信が社会主義を支持しないということを明確にした。「憲法から民法に至るまで、私が学んだ全ての法制度はみんな相対主義的哲学に基礎しているので、私は社会主義が有効な対案を提示できるということを考えてことさえ1度も無かった」。

教育を受けた韓国人の中には、盧武鉉大統領がエリート教育を受けたことがないという理由で、はじめから彼に対し、とても批判的な人たちが多かった。高位官僚の中には、米国で学んだ者も多いが、盧武鉉は大統領に就任するまで米国に行ったことがなかった。非凡な確信と意志を通じて盧武鉉大統領はこのような不利さを克服した。盧武鉉大統領は政府の高位官僚を庶民の利益を制限する反動的な社会勢力の服務者と見なす有権者にアピールする。盧武鉉大統領は法治が根幹になり、実力によって待遇を受ける進歩的で、現代的な韓国というピ



ジョンを提示する。「国民の勝利」という概念と経済好況を東北アジア国家の経済的、技術的統合の一部として把握する視点は、韓国が指導的国家になり、自らの未来を自ら決定することができるという希望を表現している。

盧大統領政権下で、参与民主主義はとても重要である。これは、国民と国家、下級公務員と政府の関係という意味での参与民主主義を指す。しかし、社会内の疎外と不平等を減らし、富の集中問題を解決するという盧大統領の約束を達成するのは容易ではなかった。一部の国民が盧大統領政権に感じる失望とは、ある程度は彼の野心に満ちた目標のせいでもある。貧民労働者の処遇を改善し、農村に投資するという盧大統領の提案の中で、多くが今まで現実的な障害にぶつかってきた。

盧大統領は、庶民・大衆の社会的、文化的要求とグローバル経済で競争する企業の要求の間で、また首都ソウルに富と教育が集中する現象と盧大統領が育った場所のような漁村地域を開発しなくてはならない具体的な必要の中で、バランスを保とうと努力している。盧大統領の「権力分散」の意志は反発を起すほかなかった。彼は多数の政府機関を大田に移転する計画を継続して推進し、権力全般を首都から移動させようと努力するなど、政府の分権化のために努力した。このような政策は、ソウルの行政、経済、知的財産および文化の400年の歴史と衝突を起こした。

「均衡的發展」についての盧大統領のビジョンは、政府が教育、文化、福祉、環境、差別撤廃などで、一層拡張した役割を担当できることを前提にする。均衡という概念は、全ての国民に機会を付与するというニューディール政策の約束とも似ている。盧大統領は、歪曲と不公正の遺産を正し、教育を通じて競争力をもった技術を増進させ、職場での女性の機会を拡大し、社会福祉の向上および社会的な不平等の解消を通じて、国民のためのセーフティネットを構築しようとした。

盧大統領の選挙運動の中で印象的なTV広告は、精神障害者を訪ねた権良淑女史の姿であった。権女史は、汚れた建物に入り、パジャマ姿の居住者と握手をした。弱者のための盧大統領の意志を注目させたこの広告は、進歩的有権者らに感動させた。TV放送で、聴覚障害者のための字幕使用が盧大統領の在任中、爆発的に増加した。全国的に放送されるニュースに障害者らが定期的に登場し、メディアで労使問題が集中的に取り上げられるようになったのは、韓国では前例が無かったことだ。

盧大統領が当選した後、韓国社会の換骨奪胎を期待した一部の人々が大きく失望したのは事実である。ロシアのサハリン島油田事業に対する韓国鉄道の投資と関連し、盧大統領の側近の中の一部が、不正に巻き込まれたことをおいて、一角では過去の政権での金権政治が全く変わっていないのではという疑問を提起したりもした。2004年2月、チリと締結した自由貿易協定(FTA)の新自由主義路線は盧大統領のために一生懸命がんばった多くの農民と労働運動家たちを失望させた。日本、米国とのFTA協定に関する類似の論議も政府が社会的問題に焦点を合わせることを望む盧大統領の支持者たちの期待とぶつかって

る。また、韓国を東北アジア経済のハブにしようという盧大統領のビジョンは彼の支持勢力であった農民、小規模自営業者、運動家らの反対をよそに、外国人投資の障壁を除去しようとする努力へとつながった。グローバル資本が支配する世界で、均衡者としての韓国の役割が、国民個人個人の守護者としての政府の役割を圧倒した。クリントンや小泉のように、盧大統領も国際市場の影響力下に徐々に引きずり込まれている。

盧大統領は全体的には既得権勢力から、具体的には官僚組織から支持を引っ張り出すのに困難を経験した。このような状況は、部分的には親日派問題および朴正熙、全斗煥政権下での権威主義的統治という敏感な問題を処理することにおいて、彼が見せた積極的な態度の結果である。例えば、1948年4月3日、韓国軍は済州島の共産主義蜂起を鎮圧する過程で20,000名以上の済州島民を虐殺した。数十年の間、虐殺について公式的には認めていなかった。2003年10月31日、済州島を訪問した盧大統領は次のように語った。「国家の首班として、本人は過去の政権の非行に心からお詫びする」。現職大統領によってなされた公式的な発表であった。これは盧大統領の真実糾明の努力の始まりに過ぎなかった。

真実を明らかにしようとする意志は議論が多く、大変苦痛であった植民統治時代に拡大した。植民地支配を経験した社会であれば、みんなそうであるように、支配者に対する賦役は社会全般深くまで染みこんでおり、特にエリート層がそうだった。そのため、盧大統領が親日真相調査の意志によって設立された委員会は、大きな議論を呼び起こした。盧大統領が任命した法曹界、学界著名人で構成された親日真相糾明委員会は、2005年の夏、本格的な調査を始める予定だ。韓国社会の年越しした恨を解決するとの約束を掲げた親日真相糾明委員会は、このような調査が政治的目的に悪用されるだろうという憂慮を呼び起こしている。

真実糾明は、植民統治の間に限られていない。1977年、金炯旭前中央情報部長の暗殺に朴正熙大統領が介入した可能性があるという、最近の発表および政府と財界の不正に対する途切れることのない調査は、新しい政治文化が定着している兆候であり、同時に盧大統領がなぜ社会各界のエリート集団から敵対感を得ているのかを説明してくれる。同様に重要なことは、高位級軍事会談および経済援助の提供などを含めた盧大統領の対北朝鮮との和解の動き、社会福祉の拡大計画、北朝鮮問題および駐韓米軍問題など、一連の問題においてブッシュ政府から独立的な姿を見せることなど、あらゆる面で反対者からの攻撃を触発させた。

盧大統領の支持勢力と既得権勢力の間の敵対感、2004年に野党および一部与党議員らが大統領を相手に提起した弾劾手続きで表面化した。政治的、経済的既得権勢力は、盧大統領がTVの記者会見において開かれたウリ党に対する支持を国民に公開的に訴えることで、憲法に明示された大統領の「政治的中立」の義務を違反したと非難した。大統領の信任を問う国民投票を実施するという彼の非正統的提案も同様に憲法違反であると烙印を押された。併せて、側近らが関与した不正と、政策的無能だという主張も提起された。このような問題が議論を繰り返す中、盧大統領の支持者らは、ソウルの通りで彼を支持するキ

ヤンドルデモを開いた。憲法裁判所は、無能と失政だとの主張は根拠がなく、開かれたウリ党の支持を訴えたのは、弾劾に該当する重大な問題ではないと弾劾を棄却した。

正当な手続きによって選出された大統領をその座から引っ張り降ろすために極端な憲法的手段を用いたことに怒った多くの韓国人が競って投票すると弾劾は逆効果を生んだ。過去には弱かった開かれたウリ党が4月15日の総選挙ではじめて国会を掌握した。この選挙で、世代間の葛藤は以前の選挙より、さらに顕著に表れた。一方では、古い時代の亡霊が徘徊しない、新しく、開かれた韓国社会を夢見る20代、30代の若い有権者がおり、もう一方には、盧大統領の政策が今日の韓国を建設した勢力に対する階級闘争であると考えている朝鮮戦争の生存者の世代がいた。

### 東北アジアに位置する力動的な韓国について盧大統領のビジョン

盧大統領は、韓国を東北アジアの経済的ハブにしようと努力した。このような韓国の役割は、ヨーロッパ連合（EU）の経済的、制度的統合と似た、この地域の未来に対する盧大統領のビジョンという脈絡から理解されなければいけない。彼は韓国が経済的、金融的、技術的に中国と少しずつ統合していているという事実—2003年韓国の対中貿易は対米貿易量を越え、同じように教育的・文化的な紐帯も活発に成し遂げられている—に対する認識と、米国を始めとする世界各国と良い政治的、経済的な紐帯を維持しようとする願望の間で微妙な綱渡りとなった。

韓国の市民団体、大学、政府機関は、東北アジアの協力を繰り返し主導的に論議していった。盧大統領は韓国において外国の資本のもつ影響力を警戒していた考えから抜け出した。部分的には外国資本が韓国で展開している事業が、アジア統合という彼のビジョンを実現することにおいて助けになるという事実を認識したからである。

盧大統領が未来の韓国の役割を最もはっきり表したのは、「韓国は朝鮮半島だけではなく東北アジア全体で均衡者の役割を担当すること」という、2005年3月22日の演説においてであった。韓国は米国との軍事的同盟関係を維持する一方で、中国、日本、ロシア等、さまざまな国の間に存在する葛藤を解消しようとする新しいビジョンの建設的な可能性は、すぐに米国と日本の否定的な反応に埋もれてしまった。韓国が米国の太平洋安保の傘から抜け出し、中国と近づいているという恐れのためであった。また、果たして韓国が地域指導者として競争的な役割をしようとしているのかという点について不確実性も現れた。東アジアの均衡者、韓国というビジョンを最後に提唱した人物は、15世紀の申叔舟であった。申叔舟以降の何百年もの間、韓国は悲劇的にもある時期、強大国、特に中国、日本、米国が賦課する政策に従属した。

しかし、概して「均衡者」としての韓国というビジョンと、国際問題においてより自己主張しようという願望は、政党間の路線を越え、訴える力をもっている。中国、日本との経済力の統合が大きな挑戦を提起する時点で、韓国の架け橋的な役割の有効性は、多くの人

も認識している。世界化によって、よくアジアの「隠遁国」として呼ばれてきた韓国の地位は決定的に終止符を打つことになった。その兆候の一つとして、韓国観光公社は、現在外国人ならば誰でも、日本語、フランス語、イタリア語、ドイツ語、アラビア語、トルコ語、タイ語、中国語、スペイン語、ロシア語、ポルトガル語、ポーランド語、スウェーデン語、ベトナム語、英語等の同時通訳とすぐに無料でつながるサービスを提供している。このサービスは単純に先進国に歩調を合わせて従うということではない。多様な言語の通訳サービスは他国の類似したサービスでは見られない、グローバルな展望をみせている。

国際主義の時代でこのような努力は韓国の対中および対日関係に影響を与える歴史および領土の複雑性について強烈な感性的な対応と対照を成す。中国は最近、高句麗（BC 37—A.D.668）を自国の領土だと主張する歴史教科書を出版した。高句麗は満州外にも北朝鮮全域を包括するため、中国の歴史教科書は強烈な抗議を誘発した。日本が独島（日本では竹島）領有権を主張する時も類似した抗議が勃発した。独島は、第2次世界大戦末以降、韓国が支配している。しかし領土と歴史を取り巻く紛争であるにも関わらず、東アジアの共有の歴史に関する韓・中・日の国民の各種の会議開催は中断せず、3国間の金融交流も持続した。

#### 盧大統領の対北朝鮮関係の改善推進

東北アジアで、韓国の未来の役割に関する盧大統領のビジョンの核心は北朝鮮だ。北朝鮮との統合および関係正常化、そして北朝鮮の核開発により引き起こされた危機の解決は、アジアにおいて、より自主的で建設的な韓国の役割のための礎石であり、同時に東アジアを引き裂く爆発的な状況を緩和することである。韓国の軍事費の支出が増え、盧大統領が時折北朝鮮を批判したりもするものの、彼は紛争の平和的解決のために努力を惜しまない。盧政府は開城工業団地の開発努力を支援した。対北朝鮮の投資を誘致するために、トップファッションモデルを参加させ開城で開催したファッションショーは、南北関係の変化の現段階を教えてくれる。韓国最大の通信会社KTは今年5月開城工業団地と北朝鮮を結ぶ電話線を開通し、その他の地域に拡大する計画だ。

韓国の計画を貫徹しようとする努力は、米国右派からの悪意に満ちた攻撃を執拗に受けた。そのため、盧政府のこのような努力の大半は、韓国のビジョンを促進するよりも、それを鎮火させる方向に傾けさせた。盧大統領の国内外の政策に対する米言論の分析は挑戦的だった。代表的なのはダニエル・ケネリーが「韓国と合意離婚する時」という題名で米企業研究所雑誌に寄稿した文である。彼はこう記した。「ソウルの現政府は短い韓国の歴史の中でもっとも反米的だ。この政府は米軍に反対する国民感情を煽動する左傾政府だ。盧政府は、米国の安保利益を持続的に阻害する信じるできない同盟国として描かれている。」世論と対立して断行した、韓国軍のイラク派遣に関する公約は、ブッシュ政権から大きく認められることはなかった。

盧政権は、北朝鮮と漁業権、通信の自由化、道路と鉄道の開放問題を協議した。同時に南

北学生と市民の集まりも組織した。短い期間だが再開した離散家族は数千名に上り、北朝鮮の映像と北朝鮮の人々とのインタビューは、韓国の TV で頻繁に放送された。何年か前までは、これは禁止されていた。

6カ国協議に対する強力な意志を見せながら、盧政府は北朝鮮を差し迫った脅威とみなすこともせず、北朝鮮が協議に復帰しない場合、「他のオプション」を暗示しなかった。盧大統領の基本概念は、長期的に信頼の環境を作ることが必須だということだ。彼は北朝鮮の核問題は、米国と北朝鮮間の問題として、双方が賛成する形で解決しなくてはならないという立場をみせた。

盧大統領は北朝鮮を和解することのできない敵だとか、全面崩壊直前にある国として示唆しなかった。むしろ彼は統合したヨーロッパのように、一つに統合したアジア共同体に向けた進展を通してのみ成しとげられるのが統一だと判断した。最後に、彼は金大中の太陽政策を踏襲した。対北朝鮮制裁では、北朝鮮の核開発を中止させることはできないと考えた。この全てのアプローチは、ブッシュ政権から疑心暗鬼で見られ、さらには敵対的行為だと見なされた。しかし多くの韓国人は、これを受け止めた。

### 盧大統領、日本と紛争

金大中と同様に、盧大統領も対日関係を改善しようという意思をもって就任した。経済的、文化的に統合した東北アジアの中心で、日本を抱擁するという戦略の一環であった。修交40周年を記念し、両国は2005年を「韓日友情年」として宣布した。二国の文化は前例にないほど交流し、韓国のドラマ、ポップ歌手は日本で厚い歓迎を受けた。日本の香水、漫画、ビデオゲーム、小説は韓国で多くのファンに出会った。相互投資が増加するなかで自由貿易協定を採決しようという協議も真摯に進行している。

韓国の人気月刊誌、「新東亜」は2月号に韓国文化に対する日本の深い関心と日本内の韓国文化ブームに関する特集記事を扱った。

そうして、驚くことが起きた。友情の年がようやく2ヶ月目に差しかかった2月23日、駐韓日本大使の高野紀元は記者会見で独島が日本の領土だと主張した。「竹島（独島の日本の名称）は歴史的に、法的に日本領土である」と彼は言った。適切ではない時期にこの発言がされ、続いて日本の艦艇が派遣され、ヘリコプターが独島付近に出現するや、韓国はこれを韓国に対する長い軍事膨張の歴史をもつ国の挑発としてみなした。第2次世界大戦中の日本の犯罪記録を削除した歴史教科書の発刊と重なり、一連の日本の行動は韓国で露骨に侵略として受けとられた。盧大統領が青瓦台のウェブサイトを書いたように「このような行動は過去の日本の侵略を合法化して韓国の独立を否定する行為以外の何ものでもない」ということである。

韓国の反発は激しかった。指を切る者もいれば、日本大使館前で行われたデモでは自らに

火をつけようとしたりした。盧大統領は3月23日、「韓日関係と関連して国民にささげるメッセージ」を書いた。彼は、「外交戦争」を宣言し、日本に強力な対応をしてこなかった過去の政府を批判した。彼は強力な外交的対応を誓った。盧大統領はしかし、日本国民に対する敵対的行動はしないよう頼んだ。

潘基文外交部長官は、日本の安保理常任理事国進出に反対すると発表した。しかしまさにこの時、盧大統領は小泉総理との予定された首脳会談を延期することを拒否し、経済、社会的関係の断絶も拒否した。彼はドイツ訪問を通じ、日本を間接的に批判し、ヨーロッパ統合を称えた。彼はまた、ドイツの安保理進出を無条件に支持すると宣言した。

## 結論

盧大統領の改革を推進するスピードは期待を膨らませると同時に、社会には不安定化ももたらした。盧大統領に反対し、保守野党を支持する多くの人々は、再び韓国を予測可能で理解できる国にしたいと考えている。しかし、韓国で引き起こされた変化は全て盧大統領一人がもたらしたのではない。盧大統領も時には英国の作家ジェフリー・チョーサーの作品『騎士の物語』の中の主人公のように必死に、「やるべきことを潔くやる」努力をしている。グローバル化は社会と経済の改革を促進する1つの目の見えない手だと言える。盧大統領はこのグローバル化の力に愛他主義の要素を加えようとしているのである。

また、盧大統領が深夜にコンピューターで書いた思慮深い言葉と、世界のその言葉に対する理解との間には大きな隔りがある。これは盧大統領が左右できるものではない。例えば、「均衡者」(balancer)は韓国語「gyunhyengja」を英語に翻訳したものである。しかし、英語の「balancer」には、盧大統領の意図とは正反対の意味がある。米国の学者の間で地政学の専門用語として使われている「balancer」は、「米国のグローバルな影響力を牽制するために同盟を形成しようとする弱小国家の試み」を意味する。例えば、中国、インド、ロシア間の協力は「balancing」(米国と均衡を保つ)が目的だ。盧大統領が使っている「均衡者」は、「対立を仲裁する儒教的なやり方」を意味している。韓国が、米国、中国、日本と深い関係を持っていて、この3ヶ国にとって均衡者であると言える、と盧大統領は考える。米国人はそう理解せず、逆にこれは米国との間に距離を置く意味だと理解している。

盧大統領は四方からくる抵抗に絶えず直面している。一方では核心の支持者の反対を押し切り、イラクに軍隊を維持しながら、また一方では保守勢力の反対を受けながら、北朝鮮と新たな対話を始めている。そして、彼はソウルで開かれた世界新聞協会の総会で「特定の利益や特定の理念をもつ新聞が新聞市場を支配してはだめだ」と語った。メディア批判が彼の将来の脅威となる、まさにそのとき、彼はそのように語った。彼の「均衡者」の概念は、韓国の政治を掌握しようとする反対勢力との終わりなき闘争で構成されている。結局のところ、均衡者の役割は、闘士のそれなのである。

盧大統領が韓国社会を変えようとするその究極の目的を、私たちは詳しく知らない。韓国

社会を開かれた公正な社会に変えようとする一方で、東アジア及び世界における韓国の地位を高めようと、彼は努力しているが、これまでずっとその理念をゆるぎなく支持してきた多くの韓国人がいなければ、彼の理想が今日まで続くことはなかっただろう。

盧大統領の反対者と支持者は、それぞれ韓国の未来についてかなり異なった見方をしている。盧大統領の努力についての異なった見解は、朝鮮王朝（李氏朝鮮）の有名な二人の王を例示することで説明される。朝鮮王朝（李氏朝鮮）は、今日の韓国の政治文化のルーツとしてたどることのできる 14 世紀から 20 世紀の王朝である。

彼を高宗（1863～1907 年在位）のような人物だと見ているのが盧大統領の反対者たちだ。高宗は朝鮮王朝最後の正統な君主である。韓国が日本の植民地になる前に、息子に王位を渡すことを強いられた王であった。高宗は列強に対抗できる近代国家の建設を熱望した。彼は欧州将軍の真似をし、勲章を胸につけた滑稽な写真を撮ったりもした。洋風建築を建てたり、近代の科学技術もいくつか導入した。しかも、「大韓帝国」という新たな国名をつけた。思い切った改革で、列強がやるような略奪をすれば、国家としての地位を獲得でき、不安定な運命を逃れると彼は考えた。しかし、韓国は日本、ロシア、中国のライバルではなかった。なぜなら、韓国には競争力のある政府機構、教育体制及び経済規模が欠けていたからである。結局のところ、高宗の現実味のない幻想が水の泡となり、韓国も主権を失い、日本の植民地に成り果てた。

これら盧大統領を高宗に例えた人たちは、韓国が地理、人口と経済において大きな制限があるため、短期的にはある種の活況が生じるかもしれないが、長い目で見れば、深刻なマイナス影響をもたらすことに違いない、と考える。なんといっても韓国は主要工業国のなかで唯一石油と天然ガスを持っていない国であるからだ。隣国と比べ、人口も少ないし、十分な食糧も生産できなし、国際貿易に依存している。韓国は弱肉強食の国際社会の隙間に存在していると、一部の韓国人は見ている。このような見方に基づくと、経済では極めて保守的な方針に従い、低姿勢を保ち、米国とは当然良好な関係を保たなければならないのが韓国の唯一の選択肢となる。このようなロジックで考えると、韓国は、経済が多様でないために、また、巨大な代価がかかる北朝鮮との統合などが加われば、生き延びることができないことになる。高宗を戒めとするならば、韓国を東北アジア新秩序の中心的な存在にする夢は、幻想かもしれない。たとえ高宗の政治的な理想が多くの韓国人の政治的無意識の中に残存しているだけだとしても、やはり彼らには絶えない憂いをもたらしてしまった。なぜなら、韓国が強い帝国になれる幻想を抱くことで、いままで米国の軍事的な傘の下で得た成果が、こういった傲慢のために全部失われると考えるからである。

これに対し、斬新な、活力のある国家にしようとする盧大統領の考えに賛同する人たち（彼の考えに賛同する人が決して全員彼を支持しているわけではないが）が、彼を世宗に例えている。世宗（1419～1450 在位）は朝鮮王朝の第 4 代君主で、制度改革を実行し、韓国史上最も長い王国をつくった。科学技術を重視し、韓国史上で注目された国家の復興を促進した。この時代では、韓国が重要な文化中心地と発展を遂げた。彼は知識人と発明家に新

しい日時計を発明させ、犯人に残虐な拷問を禁止させた仁政も実行した。勉強が上層階級の権利であるこの時代において、彼はハングル文字の発展を促進し、国民に教育を普及させることに成功した。

盧大統領を世宗のような改革家だと見なした人たち（盧大統領をこの人気のある歴史人物と完全に同等に扱っているわけではないが）は韓国が、文化と科学において実力のある、国際舞台においても重要な役割が演じられる、活力のある新興国家になれるのだ、と固く信じている。このような見方を持っているのは少数派かもしれないが、彼らは皆固い信念の持ち主である。

韓国の教育は相当高い水準にすでに達し、文化も目覚ましい繁栄を示していることは、否定できない事実である。韓国の映画、小説、歌と芸術は東アジアそして徐々に世界各地に広い影響を与えていることがこれを証明している。韓国政府もますますオープン化し、国際社会で尊敬を獲得した。電子媒体の革命が進むにつれ、オンタイム通信及びインターネット設計においても、革新が盛んに行われている。もしこのようなネットワークが世界の未来を左右できるのなら、もしグローバルネットワークの形成によって過去2千年の間に通用してきた経済及び戦略の発展方針が時代遅れなものとなるのなら、もしジョセフ・ナイが構想したソフトなパワーが現実的なものであるなら、韓国は世界で確実に強い国になれるに違いない。盧大統領は、グローバル化と技術革新によって、これまでと異なる新しい秩序が出現し始めている、という確信を明確に示した。最終的に彼が間違っている可能性もある。それでも、わずか50年の間で、韓国が極度の貧困から抜け出せ、インターネット革命の中心的な存在となってきたのは事実である。この点だけから見ても、韓国の進歩は未曾有のものである。

---

---

青瓦台大統領府ホームページには、講演、政策、オフィスタイト表および盧武鉉の生活、政治経歴ファイル（ハングル）などが載せられている。彼の講演（ハングル）も載っているし、初期の選挙候補演説、および簡単な、フォーマルな英文伝記もそこから入手できる。Nosamo Group サイトでも盧武鉉に関する貴重な資料を提供している。

このほか、盧武鉉に関する重要な情報源は2つある。1つは、1994年彼が発表した自伝、『あなた、手伝ってくれる？』である。もう1つは、同じ年に発表した短編伝記、『自分の意思で自分の道を歩んだ』であり、さらに情報が得られる。そして、『中央日報』、『朝鮮日報』、『ハンギョレ』およびMal雑誌、国民日報が編著した盧武鉉に関する文章なども参考させていただいた。



盧武鉉に関心を寄せている何人かの韓国政府の外交官および学者にインタビューをした。『読売新聞』の記者貞広高志は読売新聞に掲載した盧武鉉に関する記事を提供してくれた。最後に、Eric Marler、Jim Kawakami、Gavan McCormack と Mark Selden に感謝の意をささげたい。彼らが私に貴重な意見とアドバイスをくれた。

**Emanuel Pastreich** はペンシルバニア大学東アジア研究センターの客員研究員および『ジャパンフォーカス』のメンバーである。この論文は2005年8月1日の『ジャパンフォーカス』に掲載されたものである。